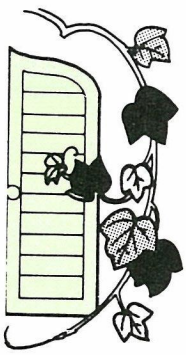


大槌の歴史

大槌氏をめぐるナゾ第二回

前回に述べた内容を含めて、大槌氏の略系図を記してみます。

大槌次郎
遠野横田城主阿曽沼朝兼の弟。初め遠野次郎という。大槌に分地され、大槌城主となる。

（この間代数不詳）

孫三郎
永享の乱あり。大槌城攻防のさ中に南部側総大将南部守行頓死し、それを機に孫三郎降りて和す。

（この間代数不詳）

孫八郎家政

孫八郎広信
あるいは広紹
天正十九年、九戸の乱に閉伊東部の諸氏を率いて南部方に参陣す。
そのご盛岡城構築の祭事に、奉行並み五人衆として参列。八百石を領す。

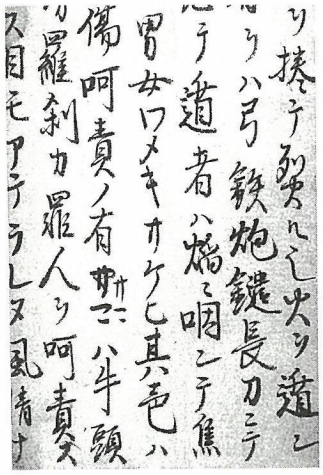
孫八郎政貞
慶長六年、南部利直に従い岩崎合戦に参陣、岩崎城を攻む。のち同城代をつとむ。平田より豊間根まで三千石を領有す。
武勇の名声高かりしが、慶長末期南部氏の謀計により囚われ、元和三年自刃す。

三徳丸
父孫八郎政貞自刃するにおよび、母とともに気仙郡に逃る。翌年大槌城を返すと南部氏に欺かれて帰城し、処刑さる。九歳という。

孫八郎広信のかかわった「九戸の乱」は、南部信直とその一族中で最大の力を誇っていた九戸政実との間に起った相続あらそいによる戦いでした。南部・九戸両陣営では、奥州遠近の諸武将、諸豪族たちにしきりに手紙をしたためたりして、自軍の勢力を拡張しようと働きかけていました。しかし阿曽沼氏も大槌氏も、他の多くの豪族たちがそうであったように、様子見をしながら、仲々に態度を表明しないのでした。もし判断を誤って敗ける方の味方についてしまったら、自分の領土や家臣たちも、自分の地位や命さえもすべて抹殺されてしまうのですから。

南部氏から阿曽沼氏へ送られた参陣催促の廻文には
「大槌殿をも召され、御出馬頼み候」
としたためてありました。南部氏にとって是非とも自陣へ迎え入れたい武将の一人が、閉伊浦々の武者たちをひろく掌握している大槌孫八郎だったのです。

かの豊臣秀吉の大軍勢が、南部信直からの要請に応え、九戸城めざして北上して来るにおよんで、阿曽沼・大槌両氏も、袰綿孫九郎や船越党などの沿岸勢と共に、南部方の陣に馳せ加わることとなります。「九戸御陣御人数積り」には
八百石大槌孫八郎
鉄炮五　弓五　部下六十人
と記されてあります。



飛田氏所蔵「南部記」

要害堅固の九戸城は、六万余の大軍に包囲攻撃されながら一向に陥落せず、むしろ攻防のたびごとに攻撃側のみ二～三百人ずつの損害を重ねるのでした。

しかし九戸政実も、ついには包囲軍からの謀状に欺かれて、自ら甲を脱ぎ頭を剃って、城門を出て捕えられます。謀状には次のように書かれてあったのです。

「―天下を敵に受けいかに防戦するといえども、ついには攻め落とされて、一門郎従までも滅亡せん―政実は元来天下に対しての逆心にあらざれば―死罪・流刑までには及ぶまじ―願わくば戦を止めて投降すべし―」

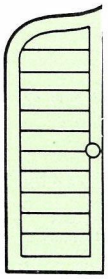
町内金沢の飛田勇一氏所蔵の『南部記』という本には、九戸城の最期が次のように記されています。

「九戸一族郎従、皆ことごとく二の丸（城内の一郭）へ追いこめられ、四方より火を掛ければ、折より火を掛ければ、折節（折から）烈風陣屋々々へ吹きかけしほどに、猛火焔をまきて烈る也。火を逃れんとて出る者をば弓、鉄炮、槍、長刀にて打ちとめ、刃を恐れて逃げる者は焔にむせんで焦れ死す。老弱男女わめき叫び、その声は頂空に（響き）、刃傷呵責のありさまは牛頭・馬頭・阿房羅刹（いずれも地獄の獄卒）が罪人を呵責するに異らず。目もあてまれぬ風情なり―」

少々長くなりましたが、大槌孫八郎もかかわったことであるし、前回に触れた国指定史跡九戸城（跡）について記述したわけです。

最後の城主となった孫八郎政貞の代には、和賀郡におこった岩崎合戦があり、政貞は南部氏側の侍大将として参陣しています。部下には戦死した者もありましたが、その内容については後に述べます。

このほか政貞は、藩主南部氏に従い江戸へ登ったおりに、徳川公をはじめ諸大名たちが並みいる桜の馬場において、稀代の荒馬を乗りこなす絶妙の馬術を披露したとか、三戸城石垣普請の現場では十六貫目（約六〇kg）の石を片手で八度まで差し上げる力技を見せ、通りかかった藩主を驚嘆させたなど幾つもの武勇譚が伝えられます。

そしてこの武勇の城主は、前回に触れたように優れた政治手腕も持ち合せたため、ついにはその城山に佇って睥睨する領地も南は平田村から北は豊間根付にいたる三千石におよんだというのです。

文・町文化財保護審議会委員
花石公夫さん